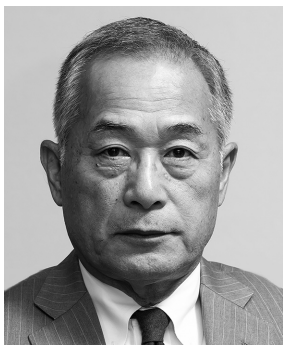


なぜ日本は先端半導体に取り組むべきなのか

経済同友会経済安全保障委員会委員、Cdots合同会社・共同創業者

小柴 満信

- *半導体は手段である
- *地政学3人のビジョン
- *テクノポラーナ世界
- *官民連携はAI、量子、バイオ
- *ビットの生産性とは
- *日本再生のキーは量子技術
- *2029年に世界は変わる
- *日本の経済密度の高さは有利
- *注目の量子生物学



山縣 それでは開会いたします。（拍手）

講師をご紹介いたします。本日は小柴満信様にお越しいただきました。日本合成ゴムで、社長、会長、名誉会長をお務めになって、現在は経済同友会で経済安全保障委員会の委員長をなさっております。それから、シンクタンクのCdots合同会社の共同創業者でもあります。2023年からは今、非常に話題になっておりますラピダスの社外取締役も務めていらっしゃいます。東洋経済から『2040年半導体の未来』という本をお書きになっておりますので、講演後にご興味のある方はぜひご覧になっていただきたいと思えます。

それでは小柴先生、よろしくお願いいたします。（拍手）

半導体は手段である

小柴 皆さんこんにちは。

こんな歴史のあるところで講演させていただけるとは、ちょっとびっくりしました。石橋湛山先生に関する本は、船橋洋一さんが書かれた本があつて、私はたまたまそれを読んでいたのですが、こういった機会に講演させていただけるのは非常にありがたいと思えます。

私は今回初めて本を書きましたが、自分の人生で本を書くなんて思ってもみなかったんです。今回、東洋経済の方々にいるいろいろご支援いただいて何とか完成しました。経済同友会では、私は先端技術の委員会から国際関係まで、6〜7年やってきたんですけれども、その間にいろいろ